

視 察 報 告 書

報告者氏名：天白牧夫

委員会名：環境教育常任委員会

期 間：令和 7 年 10 月 21 日(火)～10 月 23 日(木)

視察都市等及び視察項目：

1. 伊勢原市 教材費等学校徴収金の公会計化について
2. 北九州市 博物館のリニューアルについて
3. 清須市 国の補助金を活用した学校体育館の空調設備整備事業について

所 感 等：

1. 伊勢原市 教材費等学校徴収金の公会計化について

伊勢原市は小学校 10 校、中学校 4 校、事務職員は 22 名のコンパクトな教育体制を取っている。令和 6 年度まで私会計であり、給食費と共に教材費を年 5, 6 回口座振替で徴収し、さらに校外活動などはおよそ半数の学校で現金で徴収していた。私会計時の金融機関は限られており、保護者は別途指定された金融機関に口座を設ける必要があり手間があった。また、各学校で徴収事務にかかる時間数は約 173 時間とそれなりの労力がかかっていた。何より教員が各自から集めた現金を集計するのは教育活動以外のストレスが大きかったという。

働き方改革の一環で令和 7 年度から公会計化を開始し、教材費等徴収規則を整備した。各学校の裁量を最大限尊重する運用になっている点は好感が持てた。一方で私会計時と比較して完納までに時間がかかっている、年度末に精算するタイミングで市の職員の業務が煩雑になるという課題も知れた。事務局は生徒の出欠等により個人の状況に応じて精算することとしており、個別の内訳は保護者に開示されるということで透明性が確保されている。例外的に、裁縫セットと彫刻刀は現金のまま徴収しているといい、残存感も残る。本市では多くの学校で現金でのやりとりが続いて

おり、教職員、生徒、保護者の大きな負担となっている。本市においても教育委員会側の体制を整えた上で、早期の公会計化を望みたい。

2. 北九州市 博物館のリニューアルについて

いのちのたび博物館は生命の進化の道筋に従った展示配置をしており、特に自然科学分野の展示が豊富である。日本海側に位置することから集客力のある恐竜の展示を採用することにも一定の合理性がある。収蔵資料は展示に供しているのは1%であり、ほとんどは調査研究に用いられている。各学芸員の専門分野の展示が展開されているものの、更新頻度は低いという。市制 60 周年記念事業として令和 5 年に常設展リニューアルをした。地域の自然を紹介するエリアを新設し、生物多様性 4 つの危機をはじめ、各環境ごとの紹介している。特に展示室でカヤネズミの生体展示をするなど、病虫害の観点からかなり思い切った展示を展開している。また、今回のリニューアルで骨の展示と学校標本にフォーカスしたエリアを新設しているが、陳列展示にとどまっている感があり、学芸員の個性や博物館の思いはあまり感じることができなかった。歴史ゾーンでは、昔の町並みを再現し没入感を味わせたりシックな雰囲気や美術館的な気品が感じられるが、科学的要素は低いと感じた。屋上には茅葺きの家屋も復原されているが、これは展示物として主張することで建築基準法の制限を免れているということである。エレベータは順路の補助的な役割であり、ストーリー性は考慮されていないが、来館者数を鑑みれば適切な判断である。見せる収蔵庫も当然のごとくあった。

運営体制は学芸員が 19 名と多く、管理職にも学芸員が多く携わっている。教員や学芸員の声を博物館運営に直接反映できる組織体制となっていることが好感が持てる。来場者数や展示規模といった表面的な面のみを重視した観光施設にするのではなく、資料の収集保管調査研究といった部分にもしっかりと評価のメスを入れ、研究機関としてのレベルの向上に切磋琢磨する様子がうかがえた。また、展示室の解説ボランティアなど、友の会やシーダー組織が卓越しており、キャストの見せ方について自然・人文博物館として多くの部分で参考にできると感じた。

一方で、ミュージアムグッズの開発や有料企画の展開などが少ないわりに、入館料を徴収してしまっている点など稼ぐ博物館としては未熟であるとも感じた。自然・人文博物館におかれては、自然教育園、ヴェルニー記念館含め日本一豊富なサテライト施設と連携し成熟した社会教育施設として進化し続けることを望み、安易に観光施設化して市長部局に移管することは控えるべきであることは、今回のいのちのたび博物館がセカンドスクールとして教育要覧に位置づけられていることから示唆される。



3. 清須市 国の補助金を活用した学校体育館の空調設備整備事業について

市長のトップダウンの政策により全国に先駆けて整備したということであり、イニシャルコストは約4億円である。令和3年度に実施設計し、令和4年度に補助金を用いて約半年で施工した。工事期間中は地域の好適博物館に代替利用したが、地域の方々への学校開放等については制限があったという。ミナミメダカが泳ぐ学校ビオトープの奥には大変立派な体育館空調が整備されていて、圧巻だった。燃料使用量の問題はあるものの断熱構造にならない体育館であっても、空調の台数を増やすことで問題なく機能することを実感することができた。授業直前につけても問題なく使用できたということである。災害時は自動で照明と空調がガス発電に切り替わるということで、夜間の避難所開設も不安なく行えるということである。人工呼吸器にも使え、スフィア基準にも適合したものとなっていた。ガスを直接取り出して炊き出し等に使用することもできる設計となっていて、燃料の残存量により判断されるもののフレキシブルな構造である。一方で、燃料タンクと室外機までの間に距離があり、大正型関東地震が起きる場合大幅な隆起が想定される本市においては、災害に対し脆弱な部分も否めないと感じ、複数のエネルギー源を用意しておいた方がより安心できるかと思う。

また、清須市は学校の統廃合とは無縁ということで、そこが本

市が抱えている状況とは大きく異なる面ではないかを感じる。統廃合が予定される施設においては、災害用とはいえどの程度しっかりした機材を新設するかというのは、FM 戦略上難しい判断を引き続き迫られるのではないだろうか。また、学校開放による市民利用をする場合、清須市でも市民が電源を切り忘れるなどの課題も残っており、市の負担をどうとらえるか検討すべきである。

